



## 現実と会計の役割 (12月のごあいさつ)

平成26年12月1日(月)

12月というと、気持は少しあわたたしいのですが、雨も少なく一年中で沖縄の最もいい季節です。

会計は過去を重視するという。事業活動や行ってきた**経営の成果**を**正確に記録し、コンパクトに報告**するのが会計の役割である。この役割は重要で十分に有用なものである。しかし、役割というものに固執しすぎると、硬直化してしまいそれ以外の可能性に配慮を欠くということになる。会計が配慮を欠いている面は、**事業経営の現状、特に将来についての情報**であると言えるかもしれない。要は、現状を改善し、付加すべき役割に対する期待ではなかろうか。

何を改善し、付加すべきかということ、**情報の価値**は過去より、現在や将来にあるということである。昨日のみではなく、**今現在の成果**はどうなっているのか、どのような課題があるのか、**未来**はどのようになって行きそうなのかを経営は情報として**会計に要求**していることになる。

例えば原価計算についていうと、従来の製品個々のコストの計算から、プロセス全体の成果を管理できる計算が要求されると考えれば解り易い。**製品やサービスが多様化し、競争が激化**する今日においては、個々の製品のコストの集計では充分とは言えず、原材料や部品が工場に到達したところから、製品が生産され消費者の手元に達した後までの**プロセス全体のコスト集計とその情報の提供**が必要である。たとえ、消費者が負担していようとしまいと、倉庫保管や設置やアフターサービスのコストまでを**製品コスト**としてとらえられなければ経営判断の役に立たない。それが**コストの管理**から事業と経営のための**成果の管理**という期待される原価計算である。

小売業では、陳列棚はすべて固定コストである。従って、一定期間における一定の陳列棚からの利益を最大にすることが、経営の仕事である。いや店舗すらすべてのコストと考えるべきである。**店舗のコストを管理**するには、成果と関連づけた管理が必要である。

企業が利益を得るのは、**内部のコスト管理**ではなく、**外部の富の創造**によってであり、これが会計に反映されなければならない。経済連鎖全体のコスト管理を行わなければ、いかに製品、サービスのコストを集計しようと生産性の向上や付加価値の増加は図れずイノベーションや改善のための努力は実を結ばない。競争相手に対する企業の諜報ではなく、必要とする情報を明確にしなければならない。**変化する潮流や時代に疑問を投げかけ、正しい疑問を提起**する情報システムとしての会計の必要性がここにある。

世の中は、特に未来は指数的に変化する傾向があると言われている(激しい変化の世界)。しかし、人は単純化してものを見ようとする(静かな世界)。例えば、歴史上の出来事は、1年を1とすると10年は2、100年は3、1000年は4…という並び方である。指数関数  $y=a^x$  は、 $x$  が大きくなると、あっという間にグラフ用紙からはみ出すか、逆に値がゼロになってしまう。このように  $x$  の範囲によって、 $y$  が急激に変化するのが、指数関数の特徴でそれゆえに対数という考え方が生まれたといえる。情報化時代の未来は指数関数に似ている。

現実の世界はぼう大な情報の海である。そしてそれは確かに将来につながって行く。生の情報とはいえ日々の伝票や証ひょうの類で報告されてもかなわない。これを会計は、過去を集約し、コンパクトに、正確に有用な情報として報告している。このコンパクトさと正確さを、現在と将来の経営に役立つ情報の体系とすることが、今後の会計の大きな課題である。